



菅季治：「文芸的心理学への試み」序説(その5)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00008046 |

菅 季治：「文芸的心理学への試み」序説（その5）

A Study of Sueharu Kan, a 1940s Philosopher (5)

小田切 正 (Tadashi Odagiri) *

菅 季治 (1917-1950) は、若くして逝った北海道が生んだ哲学者であり、教師である。本稿は、ひきつづき菅の戦中における生活・思想・哲学のもつ意義をあきらかにすることである。とくに今回は、アミエル (H-F Amiel 1846-1881) について再度とりあげ、菅にとってアミエルとはなにか、について検証を行なった。キエルケゴールが、魂へのふかい洞察をもたらしたことについては、これまでみてきたが、アミエルの自然・人間観、社会観、自由論があたえた影響も深刻だと考えられたからである。

(戦争について—読者には戦争下のなかであった—、あらゆる真理を解体するもの、誤謬にたいして誤謬をたたかわせるもの、醜悪そのもの、と指摘したのも、アミエルだったことが忘れられない。岩波文庫 (四) 1879年3月3日 参照のこと)

こうして、到達した菅の思想・哲学の結節点である主体—主体関係論 (前回、「相互承認論」としてとりあげたが) について考察するとともに、両者がともに生きるために構想された、「場」とはなにかについてもふれ、その将来展望について、検討を行なっている。

(キーワード：菅 季治、世間、アミエル、主体—主体関係)

1. 「弱い魂」と、つよい魂 (その2)

—「アミエルの日記」を手がかりに—

「弱い魂」の主題は、「(弱く傷つき易い魂) 気弱、内気、小心、細い神経…他から否定され易く、また自分から否定しさえする魂。そのような魂の生態をしらべて見る」ことである。この展開は、(a) 一般的性格 (b) 他人とのかかわりにおける弱い魂 (c) けれども、弱い魂だって生きてゆかねばならない。自己同一を得、また保たねばならない。どのようにしてか? となっている。こうした「弱い魂」にふれて、菅は、つぎの例をあげている。

『弱い魂は…他人一般にさえ否定性を感じるのだから、他人が少し強く否定性をあらわして迫ってこようものなら、もうとうてい自分を支えきれない。どんなに自分に不利でつ

らいことであっても、他人に従い、他人を肯定してしまうのである。自分にできないことが分っていることでも、つい受け合ってしまうのである。「本意をまげ」「心ならずも」という自己否定をいつでもやっているのである。(中略、アミエルの引用がある) 他人に邪魔ものとみられているんじゃないかと思うと、彼の腰は落ちつかなくなる。(略)』
(「人生の論理」124頁。15号 (その3) 資料参照のこと)

では、こうして「他人一般」(「世間」) が、強く否定性をあらわして迫ってこようものなら、いったいどのように自分を保つたらよいか、菅の考察は、この点である。このような誰にたいして、誰にでもない、このいまいまいやりきれなさをアミエルをかりて、菅はつぎのものをあげている。

* 北海道女子大学

「(つまりそれはいつも私の本性と私の環境との適合の欠如ということに帰する。順応ができないのだ。…私がこの厄介な状況を残念に思うのは、それが幸福も力も奪って、淋しさと不生産しかもたらさないからである。私の方では、誰にもいやな思いをさせないように、苦しめないように、蔭に押し込まないように、息を止めないようにと工夫している—以上が略されている)ところがどんなに自分の周りに深い寂寥をつくり、いくら自分の生活と世間との間に広い諦めの地帯を設けて見ても、毒を塗った矢はその空間を越えてやはり私のところまで届く。—憂鬱な気持ち。」(「アミエルの日記」1876年2月26日 文庫版(四) 参照のこと)

アミエル(H-F Amiel 1846-1881)の日記には、このような「世間」とのあいだの、内面の失望といったものや、苦悩やさまざまな不安といったものまでもが記録されており、気分のような風景のゆれうごきといったもの、孤独な、頼りなさといったものまで、終始、記されている。またアミエルは、心理学者でもある。心理学の対象となるのは、人のあらゆる生活、あらゆる活動・行動が対象であり、そうした他の人の無数の活動を自分のなかに再現するということが、原理上、可能である、と書いている。(文庫版(三) 1870年2月1日 参照)

こうして、さまざまな事物に入っていくことで、自分を客観化すること、非我化すること、そのようにして私のなかの「未知なるもの」を発見することが、自分の批評家的、実験的な心理学の立場だということである。

だが注目しなければならないのは、こうした憂鬱な気分のいっぽう、人間性の鮮烈な追求とともに、精神の尊厳性と、人と人とのあいだの、自由のもつふかい意味を確信させてくれるのも、この日記の得がたい本質でもあるのである。

その日記をつらぬいている社会通念、世間一般の世論動向にたいする痛烈な批評、そして少

数のものの良心や品位、権利と自由といったものをまもりぬくことにしめされた、もう一面の姿勢は、当時、読むものをしてどれだけ勇気づけ、叡知をよびさましたか、はかりしれないものがある。菅がふかく読みとったと思われるのは、そうしたアミエルの人間観であり、社会観であり、自由論であったことはかたくない。1852年6月17日に、アミエルはつぎのことを書いている。

「専制政治はいずれも人間の独立と品位とを維持するものを感じく優れた本能を持っている。…精神的、倫理的、…人間的な人間を特殊化して厭し潰すこと、円満な人びとを造るのは止めて社会という機械の歯車を造ること、その中心として意識(良心)を与えず社会を与えること、精神を事物に屈従させること、人間から人間を奪うこと、これが現代を支配する傾向である。(略)

(上略)人間の人間性を擁護するのは、著述家、牧師、教育者、哲学者のなすべきことである。人間、真の人間、理想の人間、これがそういう人びとのモットー、合言葉、集まれの号令になる筈だ。人間を卑陋にし、その価値を減少し、束縛し、その本性を傷うものと戦へ、人間を強固にし、高貴にし、向上せしめるものを守れ。(以下略)」(文庫版(一) 参照、一部は本稿(その4)にあげておいた)

こうしてアミエルは、「世間」一般の常識なるものは、持前の力(注、支配の)で服従を強いるということをやりたいがらもので、それでは、この服従をはねのける、その支配から自由になるための実行とはなにか、これがわれわれがもとめる、あらゆるものの形式であり、また人間性の擁護にむけた、われわれの渴望だということである。

「自分の身を交換し、自分の胸を打ち明け自分の生活を伝え、自分の外にまで流れ出し、自分の心の天分によって…生存の範囲に互っ

て自分を増大して行くこと、これが成熟に達した生物の溜息であり願いであり、叫びである」と。(1861年8月5日 文庫版(一))。なお「世間」にむけた批評については、1876年2月25日、1877年11月6日など。文庫版(四)参照

「世間」という秩序維持に、こうして都合のいいようにはたらく「強者」の論理(秩序、権力、体制の構図)にたいして、やむにやまれぬ要求をかかげ、最小の人間の防御と抵抗をどうおしすすめるか、が、アミエルの心底の努力でもあったのである。そこでいう「強者」とは、つぎのようにふるまうものだ一と。

「(上略)自分自身以外の生命を持つ凡てのものを権利の外に置」き、「胸の悪くなる程、露骨な濫用、すぐに目につくみっともない正義の侵害、悪意と偽善の行為、それをあらゆる篡奪者がいい気になって…操返している。」(1866年10月6日 文庫版(二))
注(1)

さて、ながながとアミエルに言及してきたのは、こうした人間観、自由論が、菅をつつむように、またささえている根幹と考えられ、また菅の核心でもあると考えられたからである。「人生の論理」の七章「世間」の叙述は、キエルケゴールを別にしているなら、アミエルのこうした最良のものをじつに骨っぽく描きだしている。これにふれるまえに、いま少し、菅の生活過程をみておきたい。

菅の書いたものに、1943年1月末から6月6日までの、大学ノートに綴った日記(第1分冊とする)と、もう一つの同年6月25日～11月19日までの記録(第2分冊)がある。いずれも、苛烈な戦局を反映して、じりじりした生活の小刻みな不安をかもしだしているが、菅の柔軟な思索があとづけられる記録でもある。まず「自分の生き方」として、6月22日～25日のものをみることにしよう。

「わたしのまわりに健やかな精神はなく、わたしの心の泉はかれそうだ」

「“健全な常識”にたいして、いらいらした神経的摩擦(しかもたいして大きいじゃない)をあえてすること、或るいはときにはやってみせること—そしてそのことにいくらか得意を感じることに、ずいぶん俗悪だ」

「わたしは、この世で、他人を幸せにし、楽しませることも、また自分で喜ぶことも、まったく不適當な性格だ」

「人は幸せであることを欲する。ところで幸せであることは、あるべき自分、ほんとの自分で自分があること、すなわち自己同一性を得ていることにもとづく。だから自分の現状に満足を覚え、幸せであろうとして、人は“これでいいんだ、これがほんとうの、あるべき生き方なんだ”と自分に納得させる人生観をもとうとする。(以下略)」

「けれどもあんなに多くの人間を一様のメカニズムであやつっている世間の力は、ほんとうに恐ろしい。どうしてあんなに多くの人間を自分の支配下に引きずりこみ得たのだろうか。人間は生きるためには、存在するために、世間という専制君主、巨人の言いなりにならねばならないのか」

「あの愚かしくたいくつな、しかもあのなめらかなメカニズムにすらりと手ぎわよく乗って行けない人間を世間は、恐ろしいしつこさではじきとばす。」

日記のはしはしには、こうしたことからくる「世間に仲間入りできないだろう」といった懷疑もあり、また「わたしは弱い」「不徹底だ」「ほんの少し良心的だ」と、自分についてもふれている。そうした「“健全な常識”」にたいする、菅のいわば孤立した思いも伝わってくるが、のちにみるように、ものの自己同一性とはなにかという菅の命題について、論理的にもつめた追求と同時に、その根本の、ものの関係性

(そしてそれによる矛盾の克服について)に迫っているのも、この日記のもつ、あたらしい意味である。

だが、なによりも菅が、観察者の眼で、人間をなぎたおし、あやつっている、まことにあやしげな「世間」の力を冷静にとらえていることも注目すべきことである。こうした「世間」について、なんどもとりあげてきたことでもあり、くりかえすことはしないが、なぜそうした“支配下に(人間を)引きずりこみ得たのか”、それについてなにもかも“もうおそい”(アミエルから引用したことごとばがある)といった無念さと、疑念といったものが表明されていることもみのがしてならない。

そこで菅の、もう一点に注目しよう。「人間は生きるため、生存するために、(なぜ)世間という専制君主、巨人の言いなりにならねばならないのか」—もはや抗するには、さきが見えない歴史の激流のなかで、疑念のもっとも大きなものとは、まさにこの思いだったのである。

このあやしげなうごきのメカニズムについて、「人生の論理」第七章(「世間」)がみごとにとらえ、かつシニカルに描きだしている。「愚かしくたいくつ」だと、いっぼうで記し、だが「世間に忠実に生きる」ということは、また「たのもしく」「安らぎ」でもある、と書いている。はげしい戦局をむかえた、人びとの極限の生きざまというのは、もっぱら「たのもしく」生きることが強いられるほかなかったわけである。

この「たのもしさ」とは、つぎのものである。『アミエルは書いている。「みんな」が偉大な勢力であり主権者であって、「ひと」と名づけられている。「ひと」が、ああでなく、こう着物を着る、食事をする、散歩する、贈物をする、出ていく、入ってくる。この「ひと」は、なにをやってもつねに正しい。パディシャ(トルコのスルタン)、もしくは誤りない法王とでもいうか。「ひと」の臣民は、東邦の奴れいがそのスルタンの前に出た時よりも、もっと平伏する。

君主の思召し通りに決定して文句をつけさせない。」と。

さらにアミエルを引いて、つぎのことをつけくわえている。

『「ひと」がすべてのものの良心、判断力、嗜好、理性である。そこで各人が手を出さなくても、すべてのことが極まっている。なにごとによらず発見しようという労力を各人は免れている。「ひと」が当てがう手本を真似し、模写し、繰返してさえいれば、一つも恐れることはない。この世でもあの世でも救いが得られる。(注、以上、アミエルの引用)

だが、…そしてそれはまた彼の存在する意味の消失でもある。彼が彼であることを止め、「ひと」のようにあるならば、彼などというものがあってもなくても同じこと…』(「人生の論理」139 - 140 ページ。アミエルについては、文庫版(三)303 - 304 ページ参照)

こうして菅は、「スルタン」の君主の情景を描きながら、また“臣民”の情景をかさねて描いていた。うへの指摘のように、「みんな」が、多数派を形成し、そのうえ権威性、正統性のたかい、忠誠度のいちじるしい社会(国家)ができあがると、どんな専制力をもつか、菅の考察も、こうした点にまっすぐつながっている。

こうした社会のしくみでは、菅がしばしば指摘していることでもあるが、「みんな」以外のものにたいする、他者攻撃、他者抹消(そして、他者欠落、他者不在)もいちじるしい。抑圧と恭順にささえられた、軍事的官僚的制度というのは、おのずから、このような支配の構図をつくりあげるものなのであり、これについては前回でもくわしくあげておいた。

「ひと」が、こうして「臣民」となるメカニズムの専制政治にあって、では、われわれの「良心と判断力」「嗜好と理性」をどうとりもどしたらよいか、素朴ないいかただが、自分も他者も、ほんとうに“生きてよかった”といえ

る、信頼のもてる相互の関係、その交わりとでもいうべき自由な人間どうしのつきあいをどう構築したらよいか、この「強者」に抗する人間の論理の創造が、菅のまさに真の「願いであり、叫び」そのもの、一つの哲学の課題であったのである。

2. 主体—主体の自由な関係

—「おろしい貧弱な社会」を超えて—

菅について、いま一つ着目しておきたいのは「人の幸せ」とはなにかについてくりかえし問いつづけていることである。「他の人の幸せ」について、「自分の喜び」について、人は幸せを欲する、という、このありかたについて書いているが、それ自体、本来にたちもどって、「創造され、獲得されるべきもの」だ、という。人間“どう生きるか”の自然のすがたが、この幸福追求にあるというのが、菅の世界と違ってよく、また以下にみるように、その思想の、土台のなかの土台というべきものである。

このことは、ものの「自己同一性」とはなにか、の問題設定と一つに結びついていることなので、いまいちど、その「自己同一性」とはなにか、を吟味することになる。ここでの検証は、菅の思考過程そのものから、その考えかたの基本型をうきぼりすることである。主題は、ものの「なる、動く、はたらく論理」とはなにか、ということになるが、その思考過程、ならびに論理をみるために、できるだけまるごと書きとることを心がけたい。第1分冊の4月4日の日記からはじめたい。

「はたらき、力

Xのはたらきは、Xに属するのか、Xに属しないのか。

Xに属するとすれば、Xにはたらくことにおいて自己同一性を失わない—形成論理である。矛盾。

…なぜXは、あのようにはたらくのか？と

いう問いにたいして、あれはああいうタチなんだ、あれはああいう本能がある、と答える立場のスコラ哲学はそう考える。

けれどもそれでは、はたらきは成り立たない。何もない。対象、テロスがない。たんなる自己関係。

しかし、力は、あらわされ、発揮されねばならないのである。はたらきは、はたらきかける他者なしには成り立たない。なるとは、何か他のものになるのである。（略）

はたらき、関係は、はたらきかけるものとはたらきかけられるものとは、矛盾的自己同一において成り立つ。これを矛盾するものと自己同一的なものにわける。どちらかを自己同一とすれば、どちらかが矛盾する。なお能動=受動」（以下、4月22日、同24日による）

「○自分をXとしてあらしめる力を自分自身においてもっているかいらないか？

○自分を他から区別すること、自分から区別される他者なしに、自分を自分として示すことができないであろう。

○XがYである。

Yであることが、Xであることを支持し、確保する。—本質的属性。」

「○たんなる自己同一だけからは、他の規定はでてこない。

はたらきかけねばならない。

—さあ、こんなことを何回くり返し書いているのだ。やや暑くさえ感じられる。すべての人が生を楽しんでいる。（以下、下宿のざしきの様子が書かれている）

○自己同一に固執するかぎり、はたらきは理解されない。矛盾だ。

はたらくものは、矛盾である。けれどもたんに矛盾しているだけではない。それがはたらきかけるものをつながるかぎり、自己同一性を得るのである。（略）」

さらに、5月17日と31日には、つぎのようにある。

「ものははたらく
はたらきは矛盾的自己同一
関係
関係のろんり」

「或るものをまさに、そのものあらせるのは、そのものと、他のものとの区別である。この区別の主体は、或るものと他のものとのどちらか一方であるのでもない。どちらでもないのである。まさに両者そのものなのである。

したがって、或るものと、他のものとは、区別の主体としては同じなのである。しかもこの区別によってこそ、或るものは或るものであり、他のものは他のものであるのである。だから両者は同一における差異者なのである。はたらきにおいて同一でありながら、そのもの自身とは別なものである。相互緊張（相互斥力とも、相互引力とも見られる）の場。

（略）」

4月から5月にかけての日記には、スピノザ、ヘーゲル、ギリシャ哲学では、デモクリトス、プラトン、アリストテレスに逐一およぶ、きわめて緻密な、存在論的な追求がなされており、これが結びあって、「もの・存在（人間）」についてと、その展開として「生成・運動」論がうかびあがってくる、克明な記録が綴られている。

これらについて、ここでとりあげるということはどうていできないが、そこでの菅のねらいをひとことというなら、ものの生成と発展（その関係と矛盾による）の本質をとらえること、そしてその自体の「論理化」を試みるということである。そうした「生成・運動」論のなかでも中核と考えられるのは、なんとといっても力（はたらきあう）についてのものであり、運動するものの本質と、それを構成するものの関係性、矛盾とはなにか、のまさに存在論的な究明についてのものである。

さきにもどって考えてみよう。とにかく、この論理的な展開から、みえてくるものをいえば、そのねらいは、ほかならない人間（もの・存在）の本質をどうとらえるかの一点にしばられており、したがって人間であることの自己同一（性）がどのように成りたつか、その「生成」（菅は「成る」という）・発展をあきらかにするということである。キーワードは、まさに独立した自己と「他者」の関係性の問題ということであり、中心は、その生成と発展と、その固有の相互関係、そのなかの相互の主体関係を取りだすということである。

こうした問題のとりだしかたが、この時期、どんなにうけいれがたいものであったかは、菅自身、「関係の論理…ぼくの第1回の発展（“私の論理学を考える”）」が、「アカデミィでは無視された」（4月4日）と記していることからわかる。みじめな、ひとたまりもないものだったのである。

どんなはたらきも「他」「他者」なしには、成り立たない。そうした「他者」なしのはたらきは、「たんなる自己関係」というものであり、それは形式論者がいつもやるやりかたである。はたらきかけるものは、またははたらきかけられるものであって、こうして相互に自立して、自分を他から区別し、他はまた自分を区別するということをするものなのである。このような、たがいにむきあい、関係しあうといった、矛盾しあったやりとりのなかで、自己と他との区別とともに、それぞれの共同の地平が切りひらかれる、と考えられたのである。

これは、たんに矛盾としてだけあるというのではない。自己と「他者」、そして「他者」と自己の相互転換、相互主体的な関係が成り立って、互いにたしかに自己同一性を獲得していくことができるというものである。これについて、菅は「はたらくものは、矛盾である。けれども、たんに矛盾しているだけでない。それがはたらきかけるものをつながるかぎり、自己同一性を得るのである」と、述べている。この主体の相

互のつながりを見通したうえの、菅の洞察でもあったのである。

こうみてくると、菅の「はたらき」の論理とは、主体としての相互のつながりのなかで、自己を獲得していくことをめざした、あらたな自己探求のありかたをしめしたものであり、二つには、このこと自体、主体と主体が一つにつながることをなによりもめざした「共同化」の性格をもった、人間関係論を提起したのものととらえることができる。この主体と主体の関係性について、菅は明白につきのように述べている。もういちどあげるが――

「(上略) 区別の主体は…まさに両者そのものなのである。…他のものとは、区別の主体としては同じなのである。(略) はたらきにおいて同一でありながら、そのもの自身とは別のものである。相互緊張(相互斥力とも、相互引力とも見られる)の場。(注、この関係性について菅は、「相互移行」「区別」「反対」「分離・結合」「つながり」などのカテゴリーをあげている)

さて、このような主体－主体の関係が土台とされてどのような世界が生まれるだろうか、たしかなことは、相手は、もはやそこにある客体でも、たんなる存在といったものでもないし、たしかな自己(主体)をもった相手であり、その相手のいうことを共感をもってききとり、そこで充実した関係をつくることのできるといった、相互の確証と自己変革の、自由さをもったコミュニカルな関係性ができあがることである。

主体－主体関係における、こうした関係性を人間どうしの「共同化」活動としてとらえると、人間の自由(独立性)と尊厳性について、また生活・文化の再生産過程について、かけがえないものとしてとらえていくことのできる、まことに“健全”な道が開かれていくことになる。菅が、さきのような、人間の主体－主体関係をしたたかに、「哲学の論理」「人生の論理」として追求した根底のものは、「世間」の対極にあった

人間の“救い”そのものとして考えられていたということに注目しておきたいことである。

(菅は自分の哲学を“救いの哲学”としているのだが)

さいごに注目しておきたいのは、たがいに関係しあい、その関係を再創造していく現場を、「場」としてとらえている菅についてのものである。菅が、ここで西田幾多郎のいう「場所的論理」をもちだしているのではないことは、もはやあきらかであろう。その場とはまさに主体として自立した人間どうしのつきあいの交流の現場であると同時に、生活・文化の自由な創造を保障する場そのものであり、そしてくらしのほんとうの意味の、自己確証がなしとげられる、そうした場でなければならないということである。注(2)

人間がたがいの「はたらき」を規制するものがあるとすれば、それはまちがいなく自由な人間によってでなければならないし、それが人間どうしの関係改善をとおして、なされるのでなければならない、ということもあきらかである。西田哲学がそうであるように、人間の関係、そして国のありかたについて、「外面的」な、第三者的な超越者を媒介させて把握するという、「場所的、絶対的論理」に、痛烈な批評と、するどい対決点を展開したのが、菅であることも忘れられてならない。菅のいう場とは、菅自身のことばをかりていえば、他者との関係のなかで自分が存在し、生きていくことができ、また自然をふくむ自由さのなかで自己の生活のありようが、創造されていく、そうした関係的世界というべきものだったのである。

菅は、日記(第1分冊)のさいごにつきのものを書いている。

「日本は、今の体制を改めないかぎり、人類にプラスするより、その進めをはばむのであるだろう。これほどひどいつわりの力で、むごたらしく多くの人をなぎたおす。精神の恐ろしい貧弱さ」と。(1953年5月31日)

菅の關係的場の世界とは、こうした「ひどい
つわり」の、「多くの人をなぎたおす」「恐ろ
しい貧弱な」日本社会にむけられた、対決した
構想であったといえる。

(注)

(1) アミエルには、ここにあげたほかに、いくつも
の自由な社会を先どりした、するどい論評がある。

「すべてのものが自由な一大社会…自分の天分、もし
くは自分の小銭を持ち寄って、…承知の上で機嫌よく
貢献」し「集会的活動に協力」しあうといった地域を
想定した論評もその一つである。(文庫版(3)112 ペ
ージ) また、新時代のあらわれとして、利害について
も相互依存、あらゆる存在相互の關係がひろがったと
し、時代は国際化をむかえている、といった、時代を
とらえた批評もある。(同(3)198 ページ参照のこと)
読者の多くが、日中戦争以降の時期に、初版本を
手にして、この数々のするどい論評から得たものは、
きわめて大きかったと考えられる。

(2) 菅の西田哲学批判については、かつてとりあげ
たことがある。拙稿「学徒 菅 季治—その哲学と思想
(戦時下教師の記録) (あけもどろの会編「ことば
生活 教育」1996年 ルック発行 所収)を参照の
こと。

<資料—菅の日記から>

この日記は、第2分冊の1943年(昭43年)
6月25日～11月19日までの抄録である。掲
載にあたっては、菅の人間、思想、哲学をひろ
く理解できるものを中心に編成したが、召集ま
えの菅の人間的な苦悩についても、可能なかぎ
り表現されているものを選んで、研究上の史料
となることを心がけた。ここに菅 忠雄の配慮
によるものであることを記して感謝、申しあげ
たい。

1943年

6. 25

(上略) すべてのものは自己同一である。そ
の自己同一を成り立たせるものは、他者との

区別である。

ところで他者は、Sein Anderes として
bestiment であり、ものは、区別において、
そのような他者と同一である。すべてのもの
は、そうした区別の意味をもつ。だから、も
のははたらいて自分である、つまり自分であ
ろうとする。

6. 26

私は永遠に生きることへの望みを投げすて
得ない。歴史というものはがゆさ、正しい
ものと不正なものと、善と悪とのこみ入った
むすび合い。

歴史のむごたらしさ、これほどの消耗。つ
まりは高みに進みゆくプロセスとして信じは
するけれど。

歪み、いつわりは、破られねばならない。
革命そして再生だ。(略)

6. 27

人間は進み高まる。その方向は、物質から
精神へ

現代資本主義社会の最後の段階は物質支配、
人間の Naturgeschichte の最後の段階だ。この
次の社会からほんとうの人間史がはじまる。
精神は、Allgemeinheit と Ewigheit とだ。それ
に生きること、どんなに私ははげしくあこが
れることか。

人が人をかみ合うありさま

ふるえながら私は見ている。

心は燃える、今の世のむごたらしさと次の
世の美しさ。(以下略)

6. 30

k wが来る、召集。

ぼくに最も欠けているたくましさ、という
ものを痛く感じる。

“われ汝らを高うせんために自己を卑うし、
価なくして神の福音を伝へたるは罪なりや”

7. 1

昨夜はちっともねむらない。k wを駅に。できるだけはやくしてあげること、“論理の学問としての哲学”と“人生の論理としてのEthik”(7月4日 略)

7. 5

私たちは現実に満たされぬ悲しさ、怒りを、こどものように出し散らしてもいけないし、としよりのようにごまかし抑えてもいけない。それを内へ集中することによって強く輝くものを造り出すこと。

このごろの世相の歪み。あの神秘のヴェールを切り拂わないかぎり、健やかさは来ない。私は、あらゆる生活面で弱い自分を自分で保護しなければならない。

7. 16

もうすぐおれにも召集が来るだろう。
(略)

7. 17

ああ、力。何か宗教的な気分になる。わたしがここでこうやって書いたりしているのは(中略)もはや“人類のために”を超えたもっと広やかで高いものの中で生きることの実感。おそらくスピノザ的。(以下略)

7. 18

“われ狂へる如く言う、我なお勝れり”
これが歴史の進みに役立たないとすれば、流された血の恨みはどうなるだろうか。世界史の進歩は流血によらねば得られない、しかし、血さえ流せば歴史の歯車は必ず進むとも限っていない。(以下略) (7月24日、28日 略)

8. 4

窓をしめ、電燈を消して横になった。すると青い黄色い、白い光が部屋の内をさまよっ

ている。ホタル。このホタルは、窓が開けてあったときは入って来るのだ。部屋の外とのちがいが分からなかったのか、それともやはり外の虫どものように電燈の光にあこがれたのか。とにかく、結果においては、私は、このホタルをだましてわなにかけたことになる。もう一度窓を開いて、自由の外へ解き放とう。そう思って、眠気を追い出して立ち上る。

8. 8

“愚かな論文をつくりて喜べる男かなしや戦いの夏に”。このごろは食欲もない、夜もねむれない。“バカ、バカ”と、ひとり言う、くせつきぬ、心が暗いのだ。かなしいことだ。
(13日略)

8. 15

暗い涼しい夜。虫の音。何か心が傷む。わたしというものの不安なあり方。“人生の論理”の原理と結びとを書きかねている。喜ばない。

苦いこと思い出すたびに、バカ、バカと、ひとりごととして、追い拂っている。しかもその苦きことどもこまごまと胸につもり、あとからあとからと。堪えなさい。それがあなたの十字架なのです。(以下略) (16日、17日 20日 23日 25日 略)

8. 28

なぐさめを求める友になぐさめの一言さえも與え得ぬつらさ。なぐさめの言葉を出せば、その言葉の空しさゆえにわが胸痛む。許してくれ、ぼくもやっぱりみじめなのだ。どうしてきみを救い得ようか。

しらじらと話しもなくて向い居れり、たがいのみじめさよく知れるゆえに

わめき泣く子どもうらやまし、打ち明ける人もなすべき悲しみもてば

悲しみの深さをさえも友にてらい、友とき
そいし魂のゆがみ（以下略）

アミエルから（注、「…既に喜劇的な埋合せがいつも我々の知らないうちに何處かでついているからである。我々はいつまで経っても笑ひ草になる。特にお前の滑稽な点は何か、考えるまでもない。」と以下につづく）

（上略）、いつも無の準備をして、生き甲斐なく生きていること、思い切って純粋に静観的になれない静観、すっかり諦めのつかない諦め、慢性的矛盾、これがお前のやり口だ。”（注、1876. 9. 12）

“どうも私は偶然や不可能によってことを免れるのが好きなのだ。「もう遅い」が私の無感情と謀し合せている。それで私は汽船や汽車や機会や喜悅が自分を置き去りにして出てしまうのを上べだけしか恐れない。”（注、アミエルは、このあと、あっちの方、あっちの方に幸福がある、と希望は云ふ。ところが私は希望の方を向かないから、あっちの方、あっちの方に厭なこと、当外れがある、と呟いて、落着いている、とある。）

8. 30

自分の中に沈むことがなぜ救いであり得ないか。自分がひろがらないから。自分を否定する外の条件が相変わらずがんばっているから。やはり、はたらいて、つくって、外へ出て、自分でないものを自分のものにする—自分をひろげる、それがほんとの救いなのだ。（以下略）

“万葉集”をよんで気がついたこと。暁がアカトキとかなふられている。暁は“アカ（赤・明）い時”だから、というわけか。またこのトがどうしてツに変音したか。このトの発音はむかしは、今のトとはちがって、ツに近く発音されていたのだろうか。（以下略）

8. 31

自分であろうとする、ものははたらきつとめるのだ。そのはたらき、力が、ものを、完全な、真のそのものであらせる。論理的には、規定とか属性。（略）

どう生きるべきか。歴史的社会的に。人間として責めを負うべきは、人間に対してである。人間の広がり社会であり、人間の進みが歴史である。だから社会を広げ、歴史を進めることだけが人間のつとめであり、善である。（中略）

“おまえに必要なのは、意志の単純化と緊張化である” そうアミエルは言った。見も聞きもしないかのように、黙って考えてゆけ。

あの黄金虫ってやつは、頑丈そうに見えるけど、ひどく弱いんだね。反時代的であることはできないから、せめて超時代的であろうかと。（略）

9. 6

“人生の論理”の“原理”、やつと書き上げる。つかれおとろえた精神力。もっとよくあり得たはずだと感じる。

Descartes に“noble et fort”ということばがあるのを知った。うれしい。

Platon が、すべての運動を、能動と所動とに分けたこと。心を奪われる＝心を打ちこむ、心を引かれる＝心を寄せ（向け）る。

1 問題が対立するものについてである。個別と普遍、主観と客観、一と多、形相と質料

2 対立するもののどちらかをはたらきの主体にするかによって、学説の対立が生じる。

3 そのはたらきは、対立するものの同一化という意味をもつこと。

9. 7

（上略）魂が痛む。われわれの歴史のあり

さま。個人の自由と万人の自由。

俗悪な政策を非難するよりも、着実に、おそくとも、進んでゆく、歴史に信じ頼れ。ソクラテスは、インテリだった。社会の政治経済の現実を変改することなしに、教育によって社会を改良しよう。チャーホフ。“野分”

9. 8

のがれることではなくしりぞけること。どんなに深くても、自分に沈むこと、自分を傷つけることが無意味であることを思い知れ。生産的であること、これがおまえの救いだ。

(中略)

…神が私の魂の弱さを知って、かばってくれるかのように、easy - going で今まで生き得た。…私たちの時代のみじめさは、美しい魂が弱くて、逞しい魂が厚い皮をもっていることにも示されている。

Allgemeingültig に生きること一人間そのものとして。

おまえは、相手に迎合して、相手の気に入る、相手を笑わせることを心がけている。そして、そのためには、自分を卑しめ低めることだっにかまわない。それなのに対して効果があがらず、自分が他人から愛されないことを不平に思っている。愚かな話だ。(9日略)

9. 10

(上略) 中間、混合、程度…これらの問題が“対立”をめぐっていること。生産的であるべきこと。おまえの願いは、いつでも、不生産の床にねころがることに向けられてやしないか。(略)

Humanist には、人間らしい生きようのイデーがあらねばならぬ。そしてそのイデーの望みあこがれ—すべての人をそこまで高めようとの。

歴史の進歩を信じないものは、反動的階級

である。(略) (11日略)

9. 12

弱く拙ない魂を嘲り、いじめることに楽しさを感じる人間の本性。私は、まさに絶好のおもちゃである。私は下宿の5才の子どもにさえいじめられる。

漱石のたより。明 39. 6. 7、鈴木三重吉へ。

“現下の如き愚かな間違つたる世の中にて正しき人でありさえすれば必ず神経衰弱になる事と存候。是から人に逢う度に君は神経衰弱かときいて然りと答へたら普通の道義心ある人間と定める事に致そうと思つている。今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯純ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の軽薄に満足するひょうろく玉に候”

“世の中”従つてその愚かさ”を、歴史的現実としてとらえない抽象性。

明 39. 10. 20 野間 真綱之 (略)

明 39. 10. 20 皆川 政禧之

“世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑うにはあまり醜悪(暗礁)である”

明 39. 10. 28

“(上略) …人若し向上の信を抱いて事をなす時貴キ事神人ヲ超越シテ蓋天蓋地=自我ヲ観ス。”(注 以上一部、片假名)

つまり自分であろうとする努力においてこそ、人は救われる。

Negative なものを Negative だと示したところで、それだけじゃ何にもなりやしない。問題は、その成り立ちとこれの代わりに positive なものをつくることだ。

9. 13

混合、中間の論理、だいたいわかった。

げんきを出せよ。かなしいなまけもの。おまえの問題は、たしかにすばらしい。その解

き方は、まだ誰にも知らされていないのだ。

すべてのものは自己同一である。自己同一は、他者との区別によって成り立つ。ものがそれから自分を区別する他者は、無でもない、不定でもない。定った他者である。区別において、或るものと他のものとは同一になる。

(14日 15日略)

9. 20

このごろはひどい風だ。雨まじりの。虫をおさえる。バタバタ動く。自己同一を取りもどすため。一方だけのはたらき、はたらきがはたらきとして成り立ち得ない。抽象的矛盾。

(25日略)

10. 6

夜、コウサカ(注、高坂 正顕)先生のもとへIといっしょに。

今夜の先生は、いくらか自己告白的でもあった。もっとも自分から進んでそうふるまったのではない。Iの“内面的”な問いにすなおに応じる形で。“そうだね、ぼくはチェーホフ的かな。自分では欠点とおもっている。どうも弱いんだ”“ぼくも高等学校のころは、ドストエフスキーに読みふけた”(これはいくらか後悔めいたひびきをもって)“ずぶとさが欲しいね、クラフトが足りないんだ、エネルギーが”

そして、ぼくたちにたいして(ことに神経のいら立ちと弱さを示したIにたいして)も“精神の Hygiene がたいせつだぜ、気流はひどく陰悪なんだから。まいつちやいけない、よく眠ることだ。”

けれども主題はやはり歴史哲学的だった。歴史における相対、絶対、有限 無限の問題。あくまで人間の有限性にもとづいて、しかも無限を見、無限へともものをつくってゆく立場。カント

10. 20

だいぶ書かなかった、やっと“哲学の論理”の骨組みをつくり上げた。運命に礼を言う。よくここまで生かしてくれた。

いくらか頭がつかれた。眠りぼくなる。きせきはおこらなかった。

10. 24

学ぶは苦しみ。しかしわたしは、学ばなければ、苦しまなければ、わたしの魂は濁ってしまう。私は卑しいことばしか吐かなくなってしまう。

このごろどうも怠けてしまった。それにしても私の論理をきいてくれるひとがいないのに弱る。

11. 2

昨日でやっと“哲学の論理”を清書する。かぜをひいて、ちっとも喜びが湧いてこない。やはり、真理をつかんじゃいなかったのか。

(7日、9日、10日略)

11. 19

Nを訪れる。入営する学生だ。彼らが広さや深さをもっていないこと、ちぢこまっているけれど、それなりに誇りや意地をもっていること。

帰りに金がなくなって寒い夜、桂から歩く。カゼがひどくなる。

現代の、この国が経済的には、なおまだ個人主義的資本主義を骨髄としていること、政治が妥協的であること。だんだん、ぼくの内部が空ろでだらしなくなった。(注 このあと記載されたあとがあるが、なぜかノート7枚分が破棄されている。菅 忠雄氏によると、菅自身の破棄という。菅の召集、入隊は、このあとの11月30日)